
とある音遊戯の音楽使い(リズムマスター)

底辺の人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある音遊戯の音楽使い（リズムマスター）

【Nコード】

N4990X

【作者名】

底辺の人

【あらすじ】

能力者が集まる町、学園都市。

そこに能力名『音楽使い（リズムマスター）』の集団、『BEAT MANIA』が訪れる。

その『ビーマニ』の一員であるTAGはレベル0無能力者の上条当麻、そしてレベル5の超能力者、御坂美琴に出会う。

そして動き出す学園都市理事長アレイスターのプラン……謎の男SUPER STAR 満・MITURU……そして四聖獣

【Only My Star とOnly My Rail

gunが交差する時！ 物語は始まる！】

……ゴメン、ただこれが言いたかっただけなんだ。

・基本的に地の分無し。（ただしシリアス調やバトル時には地の分
入れます）

・時系列はとある〜一話から。

・戦闘は少なめ。

そして最後にこの小説で出て来る『ビーマニ』のメンバーは実在する似た名前の団体、人物とは関係の無い作者独自のキャラです。

名前こそ同じですが性格や生い立ち等は本家よりかなりアレンジが加えられています。

それでもいいという方は是非一度読んでみてください。

プロローグ

最先端の科学と能力者が集まる街……学園都市。

その学園都市の入口にある大きなゲートに数人の人影が集まっていた。

その集団の名前は『BEATMANIA』、「音楽使い」（リズムマスター）の異名を持つある大手ゲーム会社のコンポーザー達だ。

YOSHITAKA

「今回の仕事はここ学園都市だ！ 一、三日は自由期間だから各自自主トレなり観光なり自由にしてくれっ！」

彼は『よしくん』、チームのまとめ役であり今回の仕事のプロデューサーでもある男だ。

TAG

「……ちょっと待ってください。俺達が今日泊まるホテルは？」

そう言ってよしくんに質問しているのはTAG、今回の仕事にあたって集められたメンバーの一人である。

よしくん

「……………あー、すまん！ 忘れてた！」

ざわ……………ざわ……………

T A G

「ちょ、ちょっとホテルが無いつてどうするんですか!?!」

よしくん

「ちょっと手違いがあつてな。ま、まあみんな学園都市出身だし知り合いくらいいるだろ？ なんとかなるつて！ な!?!」

それじゃあ一時解散、と手を叩いて散るように指示するよしくん。

マジかよ、面倒臭いなあ、といいつつもメンバーは散り散りになって学園都市に散っていくのだった

この集団の存在が後に学園都市にとって大きな存在になると知らずに……………

序盤だけ地の分いれましたが次回からはセリフ増し増しでお届けします。

TAG、上条当麻と出会う

TAG

「YOSHITAKAさんからはああ言われたけれど俺には昔の知り合いなんかいないんだよなあ……………」

TAG

「昔遊んでた奴はみんな学園都市から離れたらしいし、もし学園都市に居たとしても俺はそいつらの場所知らないだろうし……………」

TAG

「仕方ない、適当にその辺を歩いてから普通にネカフェにでも泊まろうかな。」

タッタッタッタ……………

5

???

「ハア…ハア…、やっとビリビリの奴から逃げたみたいだな……………
つてうおおお!?!?」

TAG

「ん? うわっ!?!?」

ドカアッ!…………ドスッ

TAG

「痛てて……」

???

「ふ、不幸だ……。あ、大丈夫ですか!？」

TAG

「ああ、幸いケガはしてないみたいだ。君の方こそ大丈夫か？」

上条

「はい、このくらいの衝突事故なら上条さんは日常茶飯事なのですよ。」

TAG

「そうか、お互いが見えない曲がり角で、しかも結構派手にぶつかったから心配したよ。」

上条

「ん……。あれ？ 貴方はもしかしてTAGさん？」

TAG

「うん、そうだよ？」

上条

「」

TAG

「……?」

上条

「うおおおおおお！　ほ、本物のTAGさんだああああ！」

TAG

「え、ちょ。　声大きいって……！」

上条

「あ、すいません。　上条さん、TAGさんのファンなのでついビツクリしてしまいました。」

TAG

「あ、俺のファンだったの。　学園都市にも俺のファンがいるなんて嬉しいよ。」

上条

「よ、よかったら握手をしてもいいでせうか……？」

TAG

「勿論。」ガシッ

上条

「おお……。　まさかTAGさんと握手が出来るなんて上条さん夢にも思いませんでした……。　ところで今は何をしていたんですか？」

TAG

「えーと……。　仕事で学園都市に来たはいいもののホテルを予約する

のを忘れてネカフェで一夜を過ごそうかなって思ってたところだね。」

上条

「でしたら俺の家に泊まりませんか？ TAGさんともっといろいろ話してみたいです。」

TAG

「（お金はかからないしネカフェで一人で過ごすのもアレだな……）
……いいよ、もうすぐ夜だしこのままお邪魔させて貰うよ。」

上条

「ありがとうございます。それで俺の家はこっちです、案内します。」

こうしてTAGは上条当麻の家にはばらくお邪魔することになった……

とある腹ぺこシスターと不幸な少年と有名作曲家

夜 上条の部屋にて、

上条

「そうなんですよ。そのビリビリが何度もちよっかいをかけてきてですね〜」

T A G

「だから今日も追いかけてたのか、君は本当に不幸体質なんだね。」

上条

「いやいや、こんなのは日常茶飯事なので上条さん慣れてしまいましたよ。」

T A G

「そうか、だから今日の夕食は……」

上条

「ええ……」

T A G

「パンのミニ食べ放題パーティーなのか。」チマーン

上条

「ちょうど財政がピンチな物で……」シュン

T A G

「……… だけど流石にこれは酷いね。よし、ここは俺に任せて。どこか近くのアミレスにでも行こう。」

上条

「あ、ありがとうございます、ようやく上条さんにも幸運が……！」

結論から言つと

このあと上条当麻は原作を読んだ人には察しの通り、やっぱり不幸な出来事に見舞われる事になるのだった。

夜の学園都市、

上条

「えーと……、確かこの裏路地を通ればファミレスが……」

TAG

「やっぱりこのあたりは昔と全然違うなあ……。さすが最先端科
学が集まる学園都市だ。」

上条

「あれ、TAGさん学園都市に来たことあるんですか？」

TAG

「あれ、知らなかった？ 俺、学園都市の出身だよ？」

上条

「初めて聞きましたよ！ 上条さんビックリです。……あれ？
という事は能力開発を受けてたんですか？」

TAG

「うん、それなりにね。といつてもレベル4に片足突っ込んだ程
度でたいしたことはないんだけど」

上条

「いやいやそれでも十分凄いですよ。上条さんなんてペーパーの
無能力者なんで」

TAG

「……ん？ 確か君はさつき自分の能力で不幸体質になってるって
聞いたけど……」

上条

「ああそれはですね。この右手が異能の力を全部打ち消すからなんですよ」

T A G

「右手が？」

上条

「はい、能力だろうが神様のシステムだろうが。多分RPGにある魔法だって実在すれば打ち消せますよ。『幻想殺し』『イマジンブレイカー』なんて大層な名前はついてますが……俺の不幸体質もコイツが『運』を打ち消してるせいらしいんでそこまで使いやすい能力でもありませんよ」

T A G

「だがどうしてそれが無能力者《レベル0》に……ああ、そういう事か」

上条

「ええ、力を計る測定機も……ってあれ？」

T A G

「どうしたんだい？」

上条

「TAGさん。あれ……」

???

「……………」

TAG

「あの格好はシスター？ ……でも子供みただし第一なんでこんなところに？」

上条

「TAGさん、無視しましょう。」

TAG

「ええ！？ でも普通この場合助けるべきでしょ！？」

上条

「いいですか？ 『怪しげな子供のシスター』が夜の『裏路地』でこの『上条当麻』の前で『いかにもな感じ』で『倒れている』。上条さんの危険度ランキング第一位ですよ、ここは無視したほうがいいですよ。」

TAG

「う、うーん……そうなのかな？」

上条

「そうですね、いきましょーう。」

???

「……お腹が空いたんだよ」

TAG

「喋った!？」

上条

「TAGさん! それは悪魔の囁きです! 聞いてはいけません!」

???

「私は悪魔じゃなくて敬謙なシスターなんだよ! お腹が減って死にそうなんだよ!」ガシツ!

上条

「ええい! 足を掴まれるとは冗談ではない! 上条さんは忙しいんです!」

TAG

「ま、まあお腹減ってるみたいだし一食だけならいいんじゃない?」

???

「本当!?! ありがとうなんだよ! あなたは私にとっての救世主かも!」

上条

「どうなっても知りませんよ……」

TAG

「大丈夫さ、たった一回だから。」

上条

「TAGさん、それフラグです。」

TAG

「えっ？」

ファミレス『スキヤットマン』 へ

腹ぺこシスター

「バクバクバクバク……」

TAG

「」

上条

「だから上条さんは関わったらマズイと……」

TAG

「いや、まさか俺の食費一週間分とはさすがに思わなかったよ……」

上条

「見ているこっちが食欲を無くしますよね……」

腹ぺこシスター

「ふー！ 美味しかったんだよ！」

TAG

「で……イングリッドだっけ？ どうしてあんな路地裏で倒れていたんだ？」

イングリッド？

「私はそんな錬金術の先生見たいな名前じゃないんだよ！ 私にはイン（ry）」

上条

「違いますよ、こいつの名前はイカ娘ですよ。」

イカ娘

「私はイカじゃ無いでゲソ！ ……じゃなくてイカじゃ無いんだよ！ もうイしか合っていないし絶対わざとでしょ！！」ガブッ

上条

「ギャー！ー！！ あ、頭に噛み付かないで下さいイムホテップさーん！」

イムホテップ

「君が！ きちんと名前を呼ぶまで！ 噛み付くのをやめないんだよー！」

TAG

「元気なシスターさんだ……」

上条達から少し離れたテーブル

浜面

「うるさい奴らだな……」

麦野

「はーまづらあー、なーによそ見してるのかにゃーん？」

浜面

「い、いやちゃんと聞いてたよ話!？」

滝壺

「大丈夫、そんなシスターさん見てニヤニヤしてる浜面を私は応援してるから。」

浜面

「ニヤニヤしてねえって! ……ていうかなんで俺は呼ばれたんだ? 俺はこれからスキルアウトの集会があるんだぞ?」

麦野

「いや、どうせ浜面の事だから暇してるんだろつなあ……て思っただけよ。」

浜面

「俺だって忙しいんだよ。」

絹旗

「ていうか、スキルアウトやめてこっちに超来たらどうですか？」

浜面

「いや、スキルアウトやめたら俺の存在価値無くなると思うんだけど。」

フレンダ

「店員さん、サバの味噌煮下さい」

浜面

「フレンダは話すら聞いてねえ……」

麦野

「でさ、浜面にこれからちょっと協力して欲しい事があるんだけど聞いてくれるかじゃーん？」

浜面

「いや話聞いてた！？ 俺これから集会あるんだけど！？」

麦野

「へえ……浜面はどうしても協力したくないってわけ？」

浜面

「いやそうじゃなくて今はタイミングが良くなくて……って麦野さん？ なんで手をこちらに向けてるんでしょうか？」

麦野

「『アイテム』に関わってそのまま帰れると思っのかにゃー？ ぶちころしかくていいね？」

浜面

「関わるどころかまだ話の内容すら聞いてねえよ……ってギャー——！！ 店の中で能力を使わないで下さいよー！？」

再び上条達の席

TAG

「（うるさい奴らだな……）」

上条

「で、魔術だっけか？ 悪いけど上条さんはそんなオカルトじみた話は信じられませんよ。 大方、家出してきたんだろ？」

インデックス
禁書目録

「家出じゃないんだよ！ 私は『必要悪の教会』の……」

上条

「あーはいはい、それは聞きましたよ。」

TAG

「まあ、とにかくこんな時間だし今晚は泊めてあげたらどうだい？

女の子に野宿は辛いだろう」

上条

「そうですね、一晩泊めたら親の元に返してあげますか」

インデックス

「信じてくれないのはアレだけど泊めてくれるのは感謝なんだよ」

上条

「じゃ、俺の家に帰りますか」

インデックス

「あ、まだデザートが……」

T A G

「いや、もう勘弁してください」

幕間：朱雀の章（前書き）

今回はシリアス重視なので地の分を入れてお送りします。

幕間：朱雀の章

上条当麻の部屋の隣、

学生寮となっている当麻のアパートの一室。
そのベランダにタバコを吸う一人の人影があった。

ゆっくりと煙を吐きだしながらその男は部屋に居るもう一人の男に語りかける。

「まさか再び実験が再開されるとはな」

「学園都市もそれだけ成長したってことだ、レベル5も8人に増え
たし第一位の実験も順調に進んでいる」

部屋に居る男は自身のサングラスに指を触れ位置を直しつつ不敵な
笑みで答える。

少し薄暗い部屋、二人の男は何をするでも無くタバコを吸っている
男はベランダから学園都市の夜景を、サングラスをかけた男はテー
ブルに座りある写真立てを見つめている。

タバコの男は再びタバコを吸うとサングラスの男が持っている写真
立てを見て少し驚く。

写真立ての中にはサングラスの男がメイド服姿の女の子と笑いな
がらピースをしている写真があった。

「その女の子、君の彼女か？」

「彼女と同じくらい大切な俺の妹だ。今は研修中で学園都市からは離れているけどな」

「それはお前が頼んだのか？」

「ああ、可愛い妹をこれから危険になる場所に置いておく事はできないからな。妹を死なせたりは絶対にしないさ、命に変えてもな」

「ふっ、そうか君は所謂『シスコン』という人間だな？」

「否定はしないぜい」

タバコの男が苦笑するとサングラスの男も苦笑する。

しばらくすると隣の部屋が騒がしくなってきた。

ベランダからは隣の部屋の明かりが仕切り板を通して暗い部屋をほんの少し明るくする。

「どうやらお隣りさんが帰ってきたようだな」

ベランダに居た男は自身が吸っていたタバコを携帯用灰皿にいれりと網戸を開けて部屋に入ってきて来る。

「……おかしいな、確か隣は一人暮らしだったはずだが」

サングラスの男は椅子から立ち上がり壁に耳をつけると隣の部屋の様子を探る。

「これは……そうかそういうことか。全く世間ってやつは思っ

たよりもずつと狭いな」

「どういう意味だ？」

「いやなんでもない、今は別件だからな」

「ふむ、そうか」

「だが……どうやら別件でも無くなりそうだな」

「？」

「部屋には三人、一人は部屋の主、もう一人は別件の奴、そうしてもう一人は……」

タバコの男は何かに気付く

「まさか……『BEATMANIA』の仲間か」

「ああ、その通りだ」

タバコの男は険しい顔をしてサングラスの男に近寄る。

「一つ聞きたい、何故『四聖獣』の実験に関係ない仲間まで学園都市に呼んだ。『四聖獣』の奴らだけならいろいろと話せたが関係ない仲間まで呼んだせいでこちらもホテルがとれてないだの言い訳をすることになった。……それも理事長の計画のプランの一つか？」

「さあな、俺はアレイスターのプランまでは知らん。だが一つ言える事は……」

サングラスの男はタバコの男に振り返ってニヤリと笑う。
しかしその目はサングラスに隠されて見ることは出来ない。

「当初よりずっと面白くなってきた……って事だぜい」

「面白い……か。成る程、そういう表現も可能だな。」

サングラスの男はふと壁に掛けられた時計を見る。
時間を確認した彼は玄関に向かいタバコの男を呼ぶ。

「さ、時間だ。そろそろ行くぞ、《朱雀》」

「了解した、土御門」

タバコの男はサングラスの男と共に玄関のドアを開け部屋から立ち
去る。

そして二人の人影は学生寮を出ると夜の学園都市の雑踏に消えて行
った

就寝前の一時（前書き）

今回は上条&禁書の音ゲー設定についての回。
本筋とはあまり関係ないので飛ばしてしまっても大きな支障はありません。

就寝前の一時

同刻 上条当麻の部屋、

インデックス

「へえー！ TAGって音楽作ってるんだね！ どんな音楽作ってるの？」

TAG

「ゲームの音楽だよ、ビーマニって言う音楽ゲームシリーズの曲をメインに作ってるんだよ」

インデックス

「ビーマニ？ ……あっ！」

上条

「どっしたんだ？」

インデックス

「私、前にポップンって言うゲームをプレイしたときに画面にBE MANIって書いてあったね！」

TAG

「ポップンかぁー。確かエルドラドが移植されてたはずだね」

インデックス

「El dorado……って子供が犬に乗ってるやつだね！」

TAG

「おっ！ やったことあるの？」

インデックス

「うっん、私は一度しかゲームセンターは行かなかったからその曲は知らないよ、ただ曲リストには載ってたから覚えてるの」

上条

「絶対記憶ってのは本当なんだな。あ、上条さんもエルドラやりましたよ、ギタフリですけど。」

TAG

「当麻君はギタフリ派？」

上条

「はい、ギタフリの中ではやっぱりヴァネッサですよ」

TAG

「あ、ヴァネッサなんだ……あはは……」

上条

「いいアレンジですよ！ 転生編は！」

TAG

「それでも基礎はYOSHITAKAさんが作ってるんだけどね…

…」

上条

「……テ、テレビでも見ましょうか！」

T A G

「そ、そうだね！」

ピッ

『 現在、学園都市ではぬいぐるみを使った爆破事件が多発しており……』

T A G

「いぜんより治安が悪そうだね……」

上条

「ここまでの大事件はさすがにいつも起こってませんよ、TAGさんも気をつけて下さいね」

T A G

「うん、そうだね」

『 次のニュースです、画家、山上清さんの個展が学園都市で開かれる事になり 』

インデックス

「とうまーとうまー、もう眠いから寝たいんだよー」

上条

「はいはい、インデックスさんわかりましたよ。 TAGさん、テレビ消しますね」

T A G

「ああ、わかったよ」

一
目
目
了

朝の災難

翌日

チュンチュンチュン……

上条

「うーん、朝か……。早く朝ごはんを……。ってあれ？ 右手に何か違和感が……」

インデックス

「くー……くー……」

上条

「なっ！ ななななんでインデックスが裸に！？ そしてなんで俺はインデックスの胸に手を！？」

TAG

「……あー、よく寝たー」

上条

「あ……」

TAG

「え……？」

上条

「（裸のインデックスの胸に俺の右手があるって……ヤバい！）
こゝこれはですね！ 決して故意などでは無く！」

T A G

「当麻君……君は初めて出会った子に手をだすような不届き者だったのか……」

上条

「ちちち違いますって！ 朝起きたらこんな風に（ry）」

T A G

「はあ……」

上条

「違います！ だからその冷めた目はやめて！」

数分後

上条

「その間違った幻想を（ry）」

T A G

「わかったわかった。事情はわかったからその右手を下げてくれ！」

上条

「わかればいいんですよ」

T A G

「……で、どうする。異能の力が働いてた服はバラバラになってしまったわけだけど……」

インデックス

「むにゃむにゃ……大きなエビなんだよ……」

上条

「とりあえずバラバラになった服を集めて横に置きますか？」

T A G

「いや、下手にいじくと後々面倒になるだろうね。ここはそのままだ……」

インデックス

「ん……二人ともおはようなんだよ」

上条 T A G

「あ」

インデックス

「？……あれ、なんで私裸に……。ま、まさか二人して私を……」

…！」

TAG

「ち、違う！ 誤解だ！」

上条

「そうです！ 上条さん達は何もしてませんよ！」

インデックス

「へ、変態だー！」

TAG

「違う！ 俺達は変態じゃない！ 仮に変態だとしても、変態と言
う名の紳士だよ！」

上条

「なにTAGさん誤解をまねくような発言してるんですか！？ ふ、
不幸だああああ！！！！！」

虚空爆破事件：前編

結局、インデックスへの説得は朝ごはんを食べ終わるまで続いた
バラバラになった修道服は安全ピンで留めることでなんとか修復す
ることが出来た。

上条

「それじゃあTAGさん、俺は学校に行ってきますね」

TAG

「それじゃあ俺は観光でもしようかな」

インデックス

「あれ？今日は土曜日だね？　どうしてとーまは学校に行くの
？」

上条

「上条さんは補習なんですよ。　コロンプスの卵とかすけすけ見る
見るとか、やることたくさんあるんですよ」

インデックス

「コロンプス？　すけすけ？　……コロケのこと？」

TAG

「いやそれは違う」

上条

「それじゃあな、インデックス。お前も早めに親のところに戻るんだぞ」

ガチャ バタン

TAG

「……さてと、俺も観光に」

インデックス

「あなたは信じてくれるよね!？」

TAG

「え？」

インデックス

「魔術や魔導書、それに私が追われていること」

TAG

「……まあ、そんな身なりだしね。信じない方が難しいだろ。新手のドッキリならやりかねないけど……それは置いておこう」

インデックス

「……じゃあ私のこと!」

TAG

「だけど俺は君を匿う事は出来ない」

インデックス

「えっ……」

T A G

「俺なんかじゃあ君を守る事は出来ない」

お兄ちゃん……どこに行ったの？

お兄ちゃん……お兄ちゃん……

インデックス

「……人には言えない罪を抱えてるんだね。でも大丈夫だよ、
神はきっと許してくれる」

T A G

「神……か。今更許してもらおうなんて思ってないさ。贖罪は
いつか自分でやる」

インデックス

「……わかったんだよ。それじゃあ私は行くね」

T A G

「ああ……」

ガチャ バタン

T A G

「あれ、当麻君カギを忘れてるけど……ここで俺がカギをかけたら彼はどうなるんだろう?」

第七学区 \

T A G

「とりあえず防犯上鍵をかけてきたけれど……大丈夫だよね、うん」

テクテク

T A G

「さて観光観光つと……」

ピタッ

T A G

「セブンスミスト……デパートかな？ ちょっと寄ってみるか」

ウィーン

T A G

「服屋ばかりだな……」

???

「おつ、T A G！ 昨日ぶりじゃーん！」

T A G

「あ、コースケさんじゃないですか」

K o r s k

「よう。 たっくんも服を買いに来たのかな？」

T A G

「服？ いや、俺は普通に買い物……」

コースケ

「ふっふっふーん、たっくんはわかってないみたいだね」

TAG

「？」

コースケ

「ここは！ 学園都市最大の！ 服屋さんのだよ！」

TAG

「な、なんだってー!?!？」

コースケ

「というわけでだ、僕と契約して服を買いにいかないか？」

TAG

「契約ってなんですか契約って……まあいいですよ、せっかくですし行きましようか」

コースケ

「よし、そんじゃま行くっさー！」

TAG

「（相変わらずこの人のテンションにはついていけないところがあるよ……）」

四階、

TAG

「それにしても……やっぱり女性物が多いですね」

コースケ

「しかたないねえ」

TAG

「ところでコースケさんはなんでここに？」

コースケ

「えっ！？ いや、その……学園都市の流行が気になってさ！ うん！」

TAG

「……本当は？」

コースケ

「デパートと間違えました、はい。よくわかったねたっくん、読心能力にでも目覚めたかい？」

TAG

「いや、今時そんなビビり方しませんよ」

コースケ

「あちゃー。こりゃ一本とられたね！」

TAG

「それも少し古いですよ」

TAG

「この階は……女性物の下着とかパジャマがメインですね」

コースケ

「ここにはなさそうだね、次の階に行く？」

TAG

「そうしますか」

コースケ

「あっ、ちょっと待って！ あそこにゲコ太のコーナーがある！」

TAG

「コースケさん……相変わらずぬいぐるみ好きですね」

コースケ

「まあね。学園都市限定のゲコ太あるかな？」

TAG

「（なんか……子供っぽいなあ……コースケさん、いつも通りだ
けだ）」

セブンスミスト四階 ゲコ太売り場 \

コースケ

「おお……まさしくこれは今年発売された学園都市モデル！まさかここで見つかるとは思わなかったよ〜！」

TAG

「そうですね……（しかし男二人というのも少し目立つな……）」

フレンダ

「結局、ぬいぐるみを使うにもそれなりにいいものを使っているのが流儀って訳よ」

介旅

「はあ……」

T A G

(あっちはカップルさんか……？ 爆h……ゲフンゲフン ……じやなくて彼氏の方がなんか大変そうだな、尻にしかれてそうだ)

コースケ

「これはまさか幻と言われた等身大ゲコ太！？ す、凄い……学園都市のシヨップは化け物か……!?!」

フレンド

「わかった？ 結局、理解できたならそれでいいって訳よ」

介旅

「わ、わかりました……」

TAG

(あ、あれ？ 彼女さんどっかに行っちゃった？ もしかして修羅場だったか？)

コースケ

「たつくん、買うもの買ったから行くよ」

TAG

「あ、はい。わかりました……ってデカ！？ ずいぶんと大きなぬいぐるみですね!？」

コースケ

「等身大ゲコ太だよ。中々入手困難だったからラッキーだったよ」

TAG

「じゃ、じゃあ次の階行きます?」

コースケ

「そうだね、行こうか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4990x/>

とある音遊戯の音楽使い(リズムマスター)

2011年10月28日13時28分発行